“MORE”～だれもが外出しやすい街づくりプロジェクト～　ホテル編

NPO法人アクセシブル・ラボ　代表理事　大塚訓平

26班　コミュニティデザイン学科　熊倉義人　舟木沙彩
建築都市デザイン学科　武田侑　藤田裕太郎
社会基盤デザイン学科　市野塚彩音

背景

栃木県では令和4年に**全国障害者スポーツ大会**（いちご一会とちぎ大会）が開催予定であり、全国から多くの車いすユーザーが来県しホテルに宿泊することが予想される。車いすユーザーの宿泊ではバリアフリー設備の未整備といった**ハード面**、設備内容の情報の不足といった**ソフト面**が問題となり、健常者と比べて制限を受けている。

目的

【県へのインタビュー調査】
→大会に合わせてホテルのバリアフリー化を補助する事業を実施
→しかし、参加施設は少数にとどまる。

ホテルのバリアフリー化への関心を高める必要性

【県外のバリアフリー設備が先進的なホテルへのインタビュー調査】
→設備は充実
→設備の写真やその有無などの、車いすユーザーが求める情報の発信は不十分

ハード面と比べてソフト面の情報の配慮がなされていない現状

以上の調査より、26班では、**ホテルのバリアフリーへの関心を高めて、情報発信を推進するための方策を提案する**ことを目的とする。

方法

①アメリカ（ポートランド）のホテルへのインタビュー調査
バリアフリー化が先進的に行われているポートランド州のホテルに、地域デザインセンターとポートランド州立大学パブリックサービス研究・実践センターの協力の下、オンラインでのインタビュー調査を実施した。（写真１）

写真１　インタビューの様子

②座談会
ホテルの情報発信について車いすユーザーとホテル事業者の両者の視点から意見を聞くために、車いすユーザー・ホテル・学生によるオンライン座談会を実施した。（写真２）

写真２　座談会の様子

分析結果

【インタビュー調査】
○ADA（米国障がい者法）では、手すりの位置や廊下の幅などを数値で具体的に定めている。
○ADAの基準を満たしていないと他のホテルよりも劣っているとみなされ、ビジネスの機会を失うような環境にある。
○バリアフリー化をする上で一番の問題となるのは費用面である。
○政府や支援組織から金銭的・技術的支援を受けられる体制がある。
⇒**バリアフリー化への目が厳しいことで、ホテルが自らバリアフリーの基準や支援の情報を得ている。**
○アメリカでは段階的なバリアフリー化が進められており、各ホテルが少しずつ設備を整えている。
○バリアフリーは障害者だけのものではなく全ての人が暮らしやすい社会を作るという認識が根底にある。（図１）
⇒**バリアフリー化促進のヒント**

図１　バリアフリーの考え方

【座談会】
●車いすユーザーの意見
〈特にwebで発信してほしい情報〉
・客室や設備の画像
・水回りについての詳細な情報
（扉の種類と開口幅の大きさ、トイレや浴室の手すりの有無、段差の有無など）
・どの階に多目的トイレがあるか
・客室の平面図
・未整備の場合は「設備がない」という情報
〈その他〉
・車椅子ユーザーにはコミュニティがあり、宿泊しやすいホテルは口コミで広がっている。
⇒**ホテルのバリアフリー化による経済的なメリットになり得る。**

●ホテル事業者の意見
〈車いすユーザーの求める情報について〉
・今までに知る機会がなく、把握できていなかった。
⇒**座談会のような「知る機会」をつくる必要性**
・HPの変更は難しくない。
〈金銭的問題〉
・バリアフリー化では費用が大きな問題となる
・整備による金銭的メリットがあるなら考えやすい。
⇒**関心のために金銭的メリットを示す必要性**
〈その他〉
・バリアフリー化を少しずつ進めるという考えがなかった。（0か100か）
⇒**できるところから進めていくことが大切。（0から30、30から50、50から100）**

提案

アメリカと日本で異なる点の1つに、ホテルがバリアフリー情報（基準や支援制度）に触れる機会があり、日本ではその機会を増やす必要があるが、今回の調査で行った座談会自体が、車いすユーザーの求めるバリアフリーの要素やバリアフリーへの考え方をホテルに伝える「知る機会」の役割を果たした。よって、ホテルの関心向上と情報面でのバリアフリー化推進のために、**車いすユーザー、ホテル事業者、主催者による座談会の開催**を提案する。（図２、図３）
この座談会により、ホテル事業者は車いすユーザーの意見や先進事例を知ることができ、必要となるバリアフリーの要素や考え方を知り、バリアフリー化への関心を高めることができると考えられる。

また、最後にホテルのバリアフリー化の問題の解決策を両者で考えることにより、新しい解決策の糸口を発見する期待もできる。
今回は情報というソフト面でのバリアフリー化推進を目的としたが、他のソフト面での課題やハード面についての場合も、座談会は活用できると考える。

【今後の課題】
・主催者は誰がなるのか
・この座談会後に、実際に改善されるまでにはどのような支援や仕組みが必要か

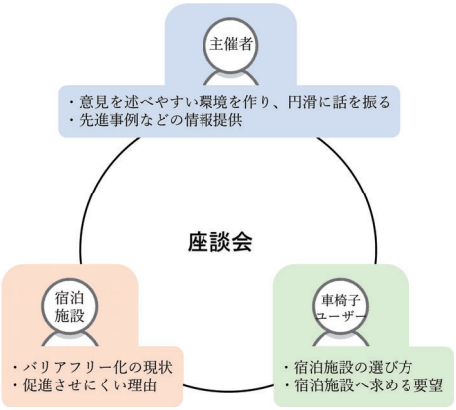

図２　座談会の３者の役割

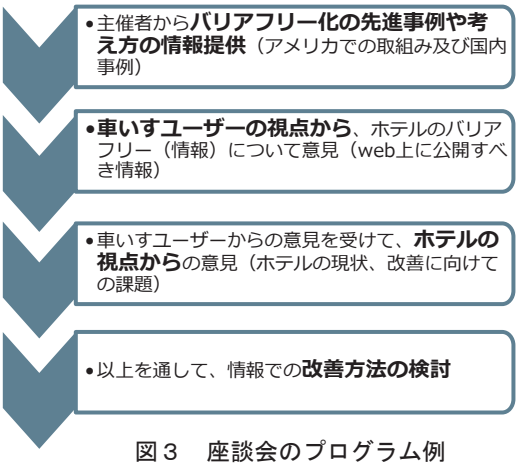

図３　座談会のプログラム例